

# 災害看護経験を持つ看護管理者がとらえた看護実践上の課題の検討

畑 吉節未

## 【目的】

多発する災害に的確に対応し被害を最小限に抑えるためには、平時からの備えが不可欠である。「災害直後から支援できる看護の基礎的知識を理解すること」を目的に、看護基礎教育課程に災害看護教育が導入されたが、適切で効果的な教育プログラムの開発が未だ十分になされておらず、その開発が喫緊の課題になっている。研究者は経験を学びに変える経験学習理論に基づくプログラム開発に取り組んでおり（畑2008）、現在、被災時に活動した看護職を対象に身につけるべき能力（コンピテンシー）の検討を進めている。そうした中で今回、看護管理者から災害時の看護実践上の興味深い課題を得ることができたので、ここに報告する。

## 【方法】

〔対象〕 阪神・淡路大震災以降に国内で生じた災害に被災地の病院で看護管理者として医療ケアに従事した者（8名）

〔データ収集の方法〕 災害時の自己又は他者の看護師の行動から災害時に成果をあげることが困難又は出来なかった事例で課題として残ったことを、急性期から亜急性期の活動体験の中から語ってもらった。

〔分析方法〕 看護管理者の語りを対象者の了解のもと記録し、逐語録を作成し、意味単位でリスト化し、カテゴリーに分けた。

## 【結果】

災害時に看護管理者であった8名のインタビューから得た逐語録から50項目の記述を得た（1人平均6.3項目）。逐語録を意味単位でカテゴリー化したところ、9つのカテゴリーが得られた。各カテゴリーを多いものからみると、〈初動態勢の確立〉（14項目）、〈自己及びスタッフの心のケア〉（9項目）、〈患者の管理〉（6項目）、〈地域への対応〉（6項目）、〈災害への備え〉（4項目）、〈災害の状況・全体像の把握〉（4項目）、〈医療資材の管理〉（4項目）、〈将来の災害への備え〉（2項目）、〈その他〉（2項目）の順になった。

## 【考察】

1) 看護管理者は災害時に直面するさまざまな困難さや課題に対処するために、災害を具体的にイメージし、行動に結びつける力が求められていることが示唆された。2) 患者へのケア提供の難しさや、死者のケアのように日常看護で実施することができるものが制約を受けるなど、災害時の役割や行動を明らかにしておく必要性が示唆された。3) 看護管理者は災害時に自らの心のケアを後回しにしてしまうなど、セルフコントロールや看護管理者を支える仕組みに課題が残ることが推察された。4) 災害時には看護師は院内だけでなく地域での活動も求められる。そのため、地域で看護を行う力や他職種と働くための調整力をスタッフに身につけさせておく必要があることが窺える。5) 災害からの学びを将来に生かすために、スタッフの振り返りを促進し、学びにつながるような適切で効率的なプログラムの検討の必要性が課題として残ったことが窺える。

## 【参考文献】

畑吉節未:経験学習理論に基づく災害看護プログラムの開発、日本災害看護学会誌、9(3)、p.10-23、2008.